

# 浮舟から狭衣へ

—— 乗り物という視点より ——

鈴木 泰 恵

From Ukifune to Sagoromo — Focus on Vehicles —

Yasue SUZUKI

ふたりの「へかぐや姫」と乗り物

狭衣物語は源氏物語をふまえ、様々にその面影をたたえる。だが、そこには常に、源氏物語に対する解釈が存在しているのであり、その解釈のうえに狭衣物語は独自の世界を切り拓いているといえるだろう<sup>①</sup>。

本稿では、狭衣物語が源氏物語とそうした関係を結びつつ、いったいどこへ向っていったのかを、狭衣と浮舟の最後にたどりついた地点をとりおさえることから考えてみたいと思う。とはいえ、唐突に狭衣と浮舟といっても、その紐帯は見えづらい。たとえば狭衣と薫<sup>②</sup>、飛鳥井女君と浮舟<sup>③</sup>、といった具合には関係づけられていないという事情がある。けれども、浮舟が源氏物語最後の「へかぐや姫」として<sup>④</sup>、また狭

衣が狭衣物語の「へかぐや姫」として<sup>⑤</sup>、ともに物語の現世と異界（昇天）という問題をつきつめている点に、その紐帯を認めることができるのではないか。このふたりの「へかぐや姫」のたどりついた地点、すなわちふたつの物語の行きついた地点を見取ることから、狭衣物語は源氏物語にいかなる解釈を介在させ、どこへ向っていったのかを考えてみたいのである。

ところで、物語のなかで、人物たちを具体的な場所に移動させるのは乗り物である。だが、その乗り物は人物たちを思いもかけない運命に、思いもかけない物語に踏み惑わせもする。たとえば夕顔の物語がそうだ。光源氏が乳母の見舞いに赴いた際の車は、夕顔との物語を切

り拓き、またふたりを乗せて某の院に向つた車は、夕顔を死地に導く。予期せぬ出会いに始まり、意想外の死別で閉じる夕顔との物語の軌跡は、車の轍とともにある。乗り物は人に操られ、人物たちを移動させるだけの具ではなく、物語そのものをどこか、ある地点へと向わせていく物でもあつた。

そうして見てみると、狭衣も浮舟もまことによく乗り物に乗つた人物である。ふたりを乗せた乗り物、あるいは乗せなかつた乗り物に注目しつつ、ふたりの、そしてふたつの物語の、行きついた地点をたどり、源氏物語から狭衣物語へという、もうひとつの軌跡を追つていくことにしたい。

### 狭衣と乗り物

それではさっそく、狭衣と乗り物の関係を見ていきたいと思う。

物語冒頭部(人物紹介を含めた広い範囲を冒頭部とする)、車という乗り物をめぐって、以下のような語りが介在して注目される。

さこそ思し離れたれど、なほこの悪世に生まれ給ひにければにや、ただひき寄せ給ふ道のたよりに、ただ少し故づきたる柴の庵は、おのづから目とどめ給はぬにしもあるまじ。ましてすみれ摘みには野をなつかしみ、旅寝し給ふあたりもあるべし。梵網経にかや、一見於女人とのたまへること思し出づれば、御車の簾うち下ろし給へど、そばの広う開きたるをば、えたて給はざるべし。

(三四～三五)

『法華経』の一句「世皆(底本「界」)不牢固」(三四・引用部少し前)

を信条に、恋には消極的な狭衣であるものの、やはり悪世のこと、ひとたび車に乗って外出すれば、恋の情趣に無関心でいられるはずがない(ましてすみれ摘みともなれば仮寝の恋のひとつもするはずだ)、そして恋心呼び起こす外の風景を遮ろうとしても簾までで、完全に物見を閉ざすことはできないはずだ、と語り手は推測しているのである。車という乗り物は、否応なく人を外界(悪世)に繋ぎ、いかに堅物の狭衣でも恋路に踏み惑わせずにはおかない。ここには語り手あるいは物語のそうした認識が示されているようだ。

現に飛鳥井女君との恋の端緒には、車が介在している。

たそかれ時の程に、二条大宮が程に遭ひたる女車、牛の牽き換へなどして、遠き程よりかと思ゆるに、そばの物見少し開きたるより円頭のふと見ゆるは、この御車を見るなるべし。(六五)

女君を盗んだ仁和寺の威儀師の車(女車)と狭衣の車が出会い、思いがけず、女君救出劇へと発展し、それがふたりの恋の発端となっている。あたかも冒頭に示された認識と呼応するかのようには、初めて語られる狭衣の恋の物語は、実に車によって導かれたのである。こうして見ると、狭衣を乗せている車は、たしかに狭衣を思いもよらぬ恋路へと誘い、いわば恋の車ともいうべき側面をもっている。これはつまり、人並みに車を交通手段とする限り、すなわち通常の生活を営む限り、狭衣はすでに逃れがたく恋の車にとらえられているということだろう。冒頭の認識はあらかじめそれを示したものだといえよう。

ところが、狭衣にはもうひとつ別様の乗り物の可能性も提示される。

・(狭衣の笛の音に) 樂の声いとど近うなりて、紫の雲たなびく、

と見ゆるに、天稚御子角髪結ひて、いひしらずをかしげにかう  
ばしき童姿にて、ふと降りる給ふに、

(四六)

・天稚御子はうち泣き給ひて、雲の輿にて昇らせ給ひぬるなごり、

(四七)

狭衣の笛の音を愛で、天童天稚御子がこの世に降り立つ。御子は狭衣を異界(天界)へと連れ去ろうとするが、帝と東宮がそれをひきとどめたので、狭衣を置いてひとり帰っていく。「紫の雲」「雲の輿」は、この世と異界を往復する天稚御子の乗り物であるが、またそれは狭衣を異界へと導くはずの乗り物でもあった。これが狭衣に提示されたもうひとつの乗り物だ。しかし、狭衣はこの世に残され、「雲の輿」に乗りそこねてしまう。では異界への乗り物はこれで雲散霧消してしまふかというところ、狭衣は一瞬現前して消えた「雲の輿」を、また違った異界へと通じる別の喩的な乗り物に、心の内で変換し再構築している。天稚御子にとり残された翌朝、狭衣は「即往兜率天上」「弥勒菩薩」(五三)と読み上げ、前夜閉ざされた異界に換えて、兜率天という仏教的異界を心のなかに定着させるのだった。狭衣らしい変換といえようか。それに伴い、異界への乗り物も喩的に変換されていった。

大白牛車<sup>①</sup>をえ思し返すまじく思ひ取り給ひてしかば、(三三七)

これは卷三末、竹生島詣を固く決意している狭衣を語りとつたものである。天稚御子事件・卷二末の粉河詣・卷三末の竹生島詣計画は連繫しており、兜率天への思いが持続していることを示す。その竹生島詣(真意は出家)で、狭衣は「大白牛車<sup>①</sup>」を得るつもりらしい。迷妄の世界を捨てた者(その端的な形は出家者だろう)に与えられる「大

白牛車」(仏智)は、まさに兜率天という異界に狭衣を導く、喩的に変換された乗り物であるに違いない。すると、兜率天のビジョンを定着させ、粉河詣、竹生島詣計画と出家を試みる狭衣は、失われた「雲の輿」に換えて、「大白牛車」という喩的な、法の車ともいべき乗り物を心の内に再構築し、追い求めていたのだったと理解される。

日常の乗り物ながら、恋路へと踏み惑わせもする車に日々乗りつつ、兜率天への導きとなる「大白牛車」を求める狭衣は、ふたつの車にとられていく。ここではそれらを、恋の車、法の車と称することにす。では狭衣とこのふたつの車の関係がどうなっていくのかを見取っておく。まず法の車についていえば、竹生島詣を果せず、この迷妄の世にとどまり続けたことから見て、狭衣がそれを手に入れえなかったことは明らかだ。ならば残る恋の車と狭衣の関係はというと、こちら微妙な様子である。たしかに、法の車を手に入れられず、迷妄の世にさまよう狭衣は、もはや恋の車ひとつにとられていくのには違いないのだが、その恋の車に狭衣はある種の挫折感を覚えているらしい。恋草積むべき料にや、と見ゆる力車どももあまたやりつつ行き違ふを、車などもいたくやつし給ひて人少ななればにや、憚る気色もなう、へ中略<sup>②</sup>心にやりてないがしろに、思ふことなげなるにつけても、

七車積むとも尽きじ思ふにも言ふにも余るわが恋草は

とぞ思しける。

(四一九〜四二〇)

即位を前に、これが最後と思って訪れた齋院(源氏宮)よりの帰り

道、狭衣はやつし車のなかから、行き違ふ荷車を眺めている。その荷車の積荷に、源氏宮へのかなわぬ恋心を託して詠んだのが「七車」の歌である。思い余り、いいようもない狭衣の恋心は、何台の車に積んでも積みきれない、とする。車には積みきれない恋心。ここでは、行き違ふ荷車に託されてはあるが、狭衣の苦しい恋心と、それを乗せる車という乗り物の間に、微妙な不協和音が響いている。そもそも、恋心に乗せ車を駆って訪れても、齋院源氏宮との恋を実現できるわけがない。齋院へと向う車は、むしろ狭衣の恋の苦悩を深めるばかりなのである。狭衣と車の間に響く微妙な不協和音は、そんな恋の車への挫折感をにじませているのではないか。

考えてみれば、車はたしかに狭衣を飛鳥井女君との出会いに導き、また宮の姫君（後の藤壺）へのぬきさしならぬ思いに誘いもした。けれども、ふたりとの恋には、常に源氏宮（姫君の場合は女二宮も加わる）への思いが影を落とし、車に導かれた恋は、複数の恋心に狭衣をひき裂き煩悶させていた。飛鳥井女君との場合は、悲しい別離にまで至り、さらにやるせない思いを抱かせるのであった。また、源氏宮への思いにとらわれ躊躇する間に、出家にまで追い込んでしまった女二宮の許へ、狭衣は幾度、とりかえしもつかないのに、恋心に乗せて車を走らせたことか。むろん女二宮に、そんな狭衣の思いは受け入れられるべくもなく、ますますやるせない思いが募るばかりだ。いずれにせよ、車は狭衣を恋の苦悩の方へと、追い込んでいったのである。

物語終局にあるこの「七車」の歌は、齋院からの帰路に詠まれたものではあるが、車に導かれた恋も、またやるせない思いを車に乗せて

往復する恋も、狭衣の恋の苦悩を深めるばかりだったことを思えば、この歌は車と狭衣の微妙な不協和音を響かせ、恋の車に対する狭衣の総合的な挫折感をにじませたものとして、とらえられてくるのではないか。

以上、恋の車にとらわれ、法の車を追い求めて、狭衣はふたつの車と関わり、しかもその双方に挫折していることを見取しておく。

しかし、こういう狭衣にまた別の乗り物があつらえられてくる。その乗り物が狭衣を、そして物語を、結局どこに連れ出していくのかを追うことにしたいのだが、その前にひとわたり、浮舟と乗り物の関係を見渡しておくことにする。

#### 浮舟と乗り物

浮舟も移動の多い人物で、乗り物との関係が深い。しかも乗り物は浮舟を様々な場所に導きつつ、その運命をも翻弄しているようだ。以下、具体的に見ていく。

浮舟が宇治の故八の宮の三女として、大君の形代という運命を担わされていくとき、車が関与する。

つつましげに下るるを見れば、まづ、頭つき様体細やかにあてなるほどは、いとよくもの思ひ出でられぬべし。扇をつとさし隠したれば、顔は見えぬほど心もとなくて、胸うちつぶれつつ見たまふ。

（宿木 四七六―四七七）

初瀬詣の帰り、宇治に向った浮舟の車は、単に浮舟を宇治に運んでいったばかりではない。そこには薫も来合わせており、浮舟は下車す

る姿を見られてしまう。薫の視線に寄り添う語り手は、中の君からふたりの類似を聞いていた薫が、この時点ですでに、浮舟に大君をよそえていたらしいことを明かす。浮舟を宇治へと導いた車は、浮舟を大君の形代としての運命にも導いているのだといえよう。

そして、三条の小家から大君ゆかりの宇治へと、浮舟を伴う薫の車は、浮舟にそうした運命を決定的に担わせる。

人召して、車、妻戸に寄せさせたまふ。かき抱きて乗せたまひつ。

(東屋 八五―八六)

宇治に向けての出発である。宇治を目前、山路を行く車のなか、

君も、見る人は憎からねど、空のけしきにつけても、来し方の恋しきまさりて、山深く入るままにも、霧たちわたる心地したまふ。

〈中略〉

かたみぞと見るにつけては朝露のところせきまでぬるる袖かな

(東屋 八八)

とある。薫は大君への思いを募らせるばかりで、浮舟をものはや大君との思い出のよすがとしか見ていない。このように、宇治に近づくにつれ大君追慕が充満する薫の車のなかに、浮舟はかき抱かれて乗せられ、今やそこにとりこめられてしまっているのである。

自身の、また薫に伴われての、双方の宇治行き車が、浮舟を大君の形代という運命に導いていったのだといえよう。<sup>14</sup>

しかし、浮舟は大君の形代という運命に安住できるわけではない。また別の乗り物が浮舟を思いがけぬ境涯に導いていくのであった。

いとかなげなるものと、明け暮れ見出だす小さき舟に乗りたま

ひて、さし渡りたまふほど、遙かならむ岸にしも漕ぎ離れたらむやうに心細くおぼえて、つとつきて抱かれたるもいとらうたしと思す。  
(浮舟 一四二)

二条院でとり逃した浮舟が、薫によって宇治に据えられていることを知った匂宮は、謀りをめぐらし宇治を訪れ、強引に浮舟と関係を結ぶ。そして、新たな恋にのめり込む匂宮は、雪を押しして再び宇治に行き、浮舟を小舟に乗せて対岸の隠れ家へと向うのだった。

・ たちばなの小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ

(浮舟 一四二)

・ 降りみだれみぎはにこほる雪よりも中空にてぞわれは消ぬべき

(浮舟 一四六)

前者は小舟の上で、後者は対岸の隠れ家で、ともに宮の歌に応じた浮舟の歌だ。「うき舟」「中空」ということは、このときの状況を超えて、浮舟が薫と匂宮の間に漂い、我が身のありよう、行方を見失っていく成り行きをいいあてている。以後の浮舟巻でそれは確実に実体化していったのである。すでに、薫にはない魅力を、匂宮に対して感じていた浮舟を乗せ、対岸の隠れ家へと向う小舟は、大君の形代という運命を変更して、薫と匂宮の「中空」に漂う「うき舟」へと、その境涯を導いていく乗り物であったといえよう。<sup>15</sup>

この浮舟の境涯は苦しい。そうした苦悩の淵にある浮舟を招き寄せたのが、宇治川であったのだが、浮舟はその川底に身を沈めきることができず、また乗り物に身を委ねる。

車二つして、老人乗り給へるには、仕うまつる尼二人、次には、

この人を臥せて、かたはらにいま一人乗り添ひて、道すがら行きもやらず、車とめて湯まゐりなどし給ふ。(手習 二七八)

これは宇治院で横川の僧都に助けられた浮舟が、僧都の妹尼に連れられ小野の里に行くところである。妹尼一行は初瀬詣からの帰路、母尼の発病により宇治にとどまる。それを聞き下山した僧都が宇治院に宿を取り、その裏手で浮舟を発見救出したのである。浮舟を親身に介抱する妹尼の心情は、初瀬で霊夢を得たことで、「いみじくかなしと思ふ人のかはりに、仏の導きたまへる」(手習 二七六)と、浮舟を仏が授けてくれた亡き娘の代わりだととらえることによつていた。小野の里においても、妹尼の浮舟に対するあり方は、「世とともに恋ひわたる人の形見にも、思ひよそへつべからむ人をだに見出でてしがな」(手習 二七八)という、かねてからの願いを託したものであった。小野の里へと向つた車は、こんどは浮舟を、妹尼の亡き娘の形代としての境遇に導くものであったようだ。

ところで、妹尼は亡き娘の婿であつた中将が、浮舟に心動かすのを喜び、ふたりの結婚を願う。娘に立派な婿を通わせることを喜ぶ母としての妹尼の姿が、浮舟によつてとり返されようとしていたのである。けれども、足立蘆子氏が鋭く指摘するように、それは浮舟の母中将の君の姿と重なり、浮舟を追いつめていくものでしかない。こうして見ると、宇治川の底に沈むことができず、小野の里に移つた浮舟は、そこで改めて浮舟物語の発端にあつた、母中将の君との関係に巡り戻されてしまつたといえるだろう。小野の里への車は、浮舟を妹尼の亡き娘の形代としての境遇に導き、同時に母子の迷妄の運命の輪に、また

それがもたらす男女の迷妄の運命の輪に、浮舟を連れ戻すものでもあつたといふことをとらえておきたい。

乗り物は浮舟を移動させるごとに、様々な運命に導いたが、それはつまるところ惑い多き運命の円環構造に、浮舟を組み込まんとするものであつたといえるだろう。

最後に、この運命の円環と浮舟の関係、そして乗り物と浮舟の関係の行方を見取つて、浮舟が、また物語が立ち至つた地点をたどつてみたいと思ふ。

例の、遙かに見やらるる谷の軒端より、前駆心ことに追ひて、いと多うともしたる灯ののどかならぬ光を見ると、尼君たちも端に出でるなり。へ中略時々かかる山路分けおはせし時、いとしるかりし隨身の声も、うちつけにまじりて聞こゆ。月日の過ぎゆくままに、昔のこのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞと心憂ければ、阿弥陀仏に思ひ紛らはして、いとどものも言はでるなり。(夢浮橋 三六九)

浮舟への執着から横川の僧都を訪れた薫が車で下山するのを、浮舟は遠くに眺め見ている。たしかにそれは、まれまれ宇治に通つて来ていたときの、薫の車の記憶をよみがえらすのだが、浮舟は「阿弥陀仏」なるものによつて、その記憶を突き放すのである。そもそも入水にしろ出家にしろ、どこまで自身の運命を見据えた自覚的なものであつたかは、はなはだあやしいにしろ、ともあれ出家を果した浮舟はここに来て、「阿弥陀仏」なるものに心を寄せ、大君の形代という境涯に、すなわち惑い多き運命の輪に本格的に浮舟を導き入れた薫の車を突き放

して、乗り物が誘う迷妄の運命の円環からようよう逃れ出ているのだといえよう。下山する薫の車とそれを遠くに眺め見る浮舟の間にある距離は、そうした浮舟の地点を示しているのではあるまいか。

むろん、乗り物から降り、迷妄の運命の円環から抜け出して、「阿弥陀仏」なるものに心を寄せたとしても、それが一直線にいわゆる救済に向うというものでもない。薫の遣いで訪れた弟小君を見て「まづ、母のありさまいと問はまほしく」（夢浮橋 二七四）と、こみあげる母への思いは、なおこれも愛執の絆であるに違いない。けれども、宇治での姉弟の愛を、そして何よりも宇治での薫との関係を、それぞれ「夢のやうなり」（夢浮橋 二七四）と感じ、「夢」（同 三七九）と口にする浮舟には、なかば現世（浮舟として生きていく足場）というものが失われている。母の期待とそれに呼応する薫の欲望を投影するのが宇治である。その宇治にこそ、浮舟の惑い多き生の足場の過半があったのではないか。宇治に集約された現世を失いつつ、なお愛執を断ち切れず、記憶という形でその現世の波が押し寄せてくれば「阿弥陀仏」なるものに心を寄せる浮舟は、よくいわれるように漂っている。しかし発作的にせよ出家に投企したことで、漂いつつ、現世の外の、絶望的に遠い「非在郷」が仰ぎ見られていることもまた事実ではないか。

浮舟が担った源氏物語の最後は、人を様々なところ様々な境涯に導き、迷妄の運命の輪にひき入れる乗り物をようやく突き放した。そして、遙か彼方におぼめくばかりで、もはやその存在の物語的再構成すらなされていないという意味で、まさに非在の名がふさわしいのであるが、ともあれ現世を超えるなにかの「非在郷」（浮舟においては

「阿弥陀仏」の名に託されて杳としたものであろう）を現出させたのではあるまいか。

#### 狭衣と輦輿

大まかながら、浮舟と乗り物の関係を追いつつ、源氏物語の最後をたどり見たので、再び狭衣と乗り物の関わりに戻って、狭衣物語の行きついたところをつきとめてみたい。

またの年の秋冬は、大原野・春日・賀茂・平野などの行幸あり。

〈中略〉例の心の内をも知らず、川渡らせ給ふ程は輦輿丁の声々も聞きにくきを、

(四四四)

思いがけず転がり込んできた帝位に即き、狭衣は各所の行幸を行う。帝の行幸であること、また〈中略〉後の賀茂の行幸に「輦輿丁」が登場していることから、その乗り物は輦輿であることがわかる。法の車にも恋の車にも挫折した狭衣に、こんどは輦輿という乗り物がしつらえられたのである。

ところで、この輦輿にはひとつ、「雲の輿」（異界の乗り物）から変換された乗り物という意が込められている。天稚御子降下の場面で、狭衣は御子と行く天界を、「宮中」という意をも有する「九重の雲の上」（四六）といいなしていた。また嵯峨帝は天界への導き手である天稚御子を「天の羽衣」（五〇）といい表していた。この「天の羽衣」には、大嘗祭の沐浴時に帝がまとう衣という意もある。これらのことを鑑みるなら、即位は昇天が変換された事態だと意味づけられるのであり、その即位に伴って狭衣が乗ることになった輦輿は、「雲の輿」の

変換物だと位置づけられてくるのである。しかも、「雲の輿」から輦輿への変換過程には、狭衣の内面において「雲の輿」から変換された「大白牛車」すなわち法の車の挫折がある。ここに「雲の輿」↓「大白牛車」↓輦輿の構図が描かれているといえよう。

けれども輦輿にはまた、恋の車からなだらかに乗り換えられ、現世(悪世)を巡る乗り物という側面も貼りついている。

それと見る身は船岡にこがれつつ思ふ心の越えもゆかぬか

などやうに、野・山・川の底をご覧するにつけても、思し沈みにし方さまのことは、さらに忘れ給はず。(四四六)

巡幸の最後に狭衣は平野に行幸する。引用の独詠歌は、賀茂の齋院に向い合う船岡山を輦輿から眺め見て、我が身が齋院源氏宮と隔てられていることを痛感しつつなお、思う心が届いて充足できないものかという狭衣の思いを表している。この後の語りが総括するように、輦輿から見る様々な風景は、報われなかった悲嘆とともに深く心に刻み込まれた恋心を、改めて呼び起こすのであった。

これは、かつて狭衣の恋心を乗せて齋院へと(また女二宮のいる嗟峨へと)向った恋の車が、かなわぬ恋のやるせなさ、さらなる恋心を呼び起こしていた状況と何ら変わりが無い。輦輿は、狭衣が挫折感を覚えた恋の車に替わって、迷妄の現世を経巡り、そこに狭衣を繋ぎとめる乗り物でもあったのである。

狭衣の乗っている輦輿は、「雲の輿」の変換物でありながら、狭衣をいかなる異界へも導かず、この世(悪世)を巡って、相変わらず不毛な恋の苦惱へと狭衣を導くばかりだ。それは、いわば恋の車と法の車

(異界への車)をないまぜにして、異界とこの世の境界をはずし、迷妄の現世のなかに異界のみこみ解体させてしまう乗り物だったといえよう。

「雲の輿」の変換物でありながら、恋の車をひき継ぐこの不可思議な輦輿という乗り物は、では狭衣と物語をどういう地点に連れ出していったのかを確認したい。

狭衣の最後の行幸地は嗟峨院で、ここでの場面が物語の最後を飾っている。

出でさせ給ふ御心地、なかなかおぼつかなくて過ぐさせ給ふ年月よりも飽かずあはれに思し召されて、御輿にも奉りやらす。

この行幸は嗟峨院の病氣見舞いのためであったが、むろんそれだけではいられない。案の定、狭衣はまたもや心をかき乱し、後ろ髪を引かれる思いで、前栽に立ちつくすのであった。

不毛な恋に惑乱する狭衣の立ち至った地点は、以下の女二宮へのことばのなかからとらえられそうだ。

なほ、いかでかくあらぬ所もがなと願ひ侍るも、いさや。さても、かう憂きものに思し果てられながらは、いづくにもあり難うや。後世もいたづらとかやなし侍らんこそいみじけれ。死にもせじとか。まことに身をこそ思ふ給へわびにたれ。

消えはてて屍は灰になりぬとも恋の煙はたちもはなれじ

(四六五―四六六)



兜率天という異界に導くはずの出家をいまだに願ってはいるが、女二宮に嫌われたままではそれもできず、この世にもあの世にも安住の地は得られないという。そして、たとえ死んでも、この恋心を消すことはできないという歌まで詠みかける始末であった。この「消えはてて」の歌は、報われない恋心から、死んでも解き放たれることがないという恋歌であると同時に、それはこの迷妄の恋心によって、死後も救われない（「後世もいたづら」という思いを改めて表出したものだろう。

あの世にもこの世にも安住の地はなく、たとえあの世に行っても、迷妄の恋心によって、この世に惑いを残すという狭衣には、もはや幽明の境もなく、この世と地続きに、あの世にも無明の闇が眺め見られているようだ。輦輿での嵯峨院行幸は、この世の惑いに浸蝕されたあの世での、無明の闇を眺め見るような地点への移動だったといえよう。現世との境界を失った後世に、無明の闇を眺め見る狭衣の、この世での将来も、この行幸で奇妙に規定された感のあることを、最後に掬い取っておく。

狭衣即位の際、天照神の神託で、嵯峨院の子としてある若宮と狭衣の親子関係が明かされた。院もその神託の件を耳にして、事実を察知したらしい（四四九）。そうした事情をふまえたものか、院はこの嵯峨院行幸の機に、若宮と女二宮の将来を狭衣に託す。さらに加えて、次のようなやりとりをしている。

「……位を去り給ひても、ここを荒らさで必ず住み給へ」など申し置かせ給へば、何事も思しおきてんには、違へさせ給ふまじき

よしを聞こえさせ給ふに、

（四六四）

院は狭衣が退位した後に、この嵯峨院に住むようにといい、狭衣もそれを受ける。退位後の狭衣は、おそらく出家の身となるのであろう。とすると、そうした姿でこの仏教空間に、だがなんと、狭衣の心を惑わして止まない女二宮とともに住まうことになる。少なくともここで、狭衣は院にそうするといっているのである。このやりとりから見える退位後の狭衣の将来は、後世を祈る空間で、しかも出家姿で、限りなく女二宮に心を乱していく姿ではあるまいか（女二宮も狭衣の惑乱に心を乱されるであろうが、その点については今は措く）。仏教空間での恐ろしい破戒とまではいかなくとも、ともに蓮の上を祈る姿でどうていありえまい。場面としては前後するが、先に見た物語最終場面での、無明の闇の仰望が何よりもこのことを証だてているだろう。また、狭衣が後世を祈るのであれば、天稚御子事件（天折）↓粉河詣（兜率天）↓竹生島詣（大白牛車）と変転しつつ一筋に繋がる、あの竹生島でしかありえないのではないか。

いかばかりの時間であるかはわからないが、退位後の狭衣の将来もまた、後世を祈るべき空間に迷妄の現世がそのままだれこむ空間となるであろうことが、この院とのやりとりによって規定されてしまったようだ。

輦輿は、現在においてばかりか、この世での将来においても、またあの世においてさえも、迷妄の現世が後世（異界）というものを浸蝕してやまない、永遠の闇のなかに、狭衣と物語を連れ出していったのではあるまいか。

この世と異界の境界がはずされ、迷妄の現世が異界を浸蝕するこのような地点を、「混在郷」と名づけておく<sup>(19)</sup>。狭衣はもはや仰ぎ見るこの世の外への希望さえも失い、永遠の「混在郷」を踏み迷っているのである。そしてそこがこの物語の至りついた絶望的な地点なのだと思うのである。

#### 源氏物語から狭衣物語へ

ともに「月の都」に至りえなかつたふたりの「へかぐや姫」として、狭衣と浮舟は意外に近しい関係にある。それをたとえば「あの世もこの世もない」とか、「あの世とこの世にひき裂かれている」、「あの世との差異はほとんどないだろう。しかし、たとえ実在の場所をもたず、形すらない、至りえぬ「非在郷」であれ、それを眺め見る浮舟と、仰ぎ見る「非在郷」すらなく、永遠の「混在郷」を踏み迷っている狭衣の差異は、実は大きいのではあるまいか。

源氏物語がきわめてネガティブな「非在郷」（それが本質的な属性であろうが）を提示したのだとすれば、狭衣物語は仰ぎ見られるものもはや無明の闇でしかなく、「非在郷」すら存在しない地点において「混在郷」を提示するのである。それは狭衣物語が、浮舟に「非在郷」への到着不能を予感していたからに他ならないだろう。乗り物に導かれて、ふたりの「へかぐや姫」である狭衣と浮舟の行末を追い、源氏物語（浮舟）から狭衣物語（狭衣）へという軌跡をたどってみると、狭

衣物語は源氏物語におほめく「非在郷」の不可能を読み解くことよって、「混在郷」というより深い不安と絶望に佇むことになったのだと見るべきではあるまいか。

そして、この「混在郷」の不安と救いのなさに踏み迷うことこそが物語なのだという物語観を、源氏物語を経た狭衣物語に見取っておきたいと思う。詳細は改めて論じるしかないが、これは、物語の肌ざわりを異にしつつ、浜松中納言物語や寝覚物語とも一脈を通じる物語観であるように思われる。

#### 注

- (1) 井上眞弓『狭衣物語』の引用・断面——夢のわたりの浮橋を軸として——（『日本文学』昭和62年4月）は、それを「批評」ということばでとらえ、引用のレベルから論じていて示唆に富む。なお拙稿「狭衣物語とへかぐや姫」——貴種流離譚の切断と終焉をめぐって——（『武蔵野女子大学紀要』32 平成9年3月）も、貴種流離の物語の行方という観点から、狭衣物語が光源氏の物語をどのように批評し、どのような物語となっていたのかを論じた。その際、第二部との関係については論じえなかつたので、本稿において改めて論じたい。

(2) 薫と狭衣の類似・相違はよく指摘されるが、後藤康文「もうひとり薫——『狭衣物語』試論——」（『語文研究』68 平成元年12月）は、狭衣が源氏物語正編をひき継ぎ、薫と同じ時間を生きるもうひとりの別の薫として設定されているという、新たな視点を示してい

る。

(3) 浮舟をふまえた飛鳥井女君の物語の独自性について、やはり乗り物という観点から、『叢書想像する平安文学』2(勉誠社近刊)で論じた。併せて御参照いただければ幸いである。

(4) 浮舟とへかぐや姫の問題については古来指摘があり、様々に論じられているが、最近の小嶋菜温子「浮舟とへ女の罪——ジェンダーの解体——」(『源氏物語批評』有精堂刊 平成7年7月)は、へかぐや姫と浮舟を極限までつきつめている。

(5) 深沢徹「往還の構図もしくは『狭衣物語』の論理構造——陰画としての『無名草子』論——(上・下)」(『文藝と批評』5—3、4 昭和54年12月、昭和55年5月)が明確に狭衣をへかぐや姫だと規定して論述。論旨を異にするが、注(1)拙稿もへかぐや姫と狭衣を確認したうえで論じている。

(6) 引用本文は内閣文庫本(手許の写真版)に拠り、適宜表記を改め、諸符号を付した。なお参考として同本を底本とする大系本の頁数を括弧内に示した。

(7) 『法華経』随喜功德品の句(岩波文庫下)

(8) 「紫の雲」には「楽の声」もとり合わされていて、御子降下の場面は来迎図とも重なり合うが、降下から昇天の全体としては、竹取物語の昇天場面が重ね合わされている(注(1)拙稿)。ふたつの要素が重なり合うなかで、「紫の雲」は「雲の輿」といい換えられたのだけと見る。

(9) 『法華経』普賢菩薩勸発品の句(岩波文庫下)。校本によれば、いわ

ゆる第一系統本(深川本、平出本、底本)独特の本文で、弥勒信仰の背景を濃厚に打ち出していると思われる。

(10) 拙稿「狭衣物語粉河詣について——『この世』への道筋——」(『中古文学』43 昭和63年5月)。粉河詣は普賢の示現(兜率天への導き)により天稚御子事件と連繫する(拙稿)が、また一方、そこで出会った飛鳥井女君の兄である僧が媒介となって粉河詣と竹生島詣計画を連繫させている。たとえば巻三で一品宮と結婚した後、『普賢の御光も忘れ難きを、いかでかの修行者(飛鳥井兄)をと、人知れず思しけり』(二八二)とあり、粉河で出家を果せず兜率天への切符を手に入れえなかった狭衣は、それを飛鳥井の兄僧の許での出家によってとりかえそうとしている。兄僧のいる竹生島への詣計画は、狭衣の内側では粉河詣と連繫するものである。狭衣における天稚御子事件↓粉河詣↓竹生島詣計画の連繫と兜率天への思いが読み取られる。

(11) 『法華経』譬喩品の句(岩波文庫中)。

(12) 忍び歩きの車で、偶然に邸の前を通り、見事な桜に目をひかれて、美しい母君を垣間見たことから、姫君への思いも募っていった。

(13) 源氏物語の本文引用は日本古典文学全集に拠る。

(14) 三田村雅子「濡れる身体の宇治——水の感覚・水の風景——」(『源氏研究』2 平成9年4月)は、浮舟への思いを大君恋慕に回収し幻想する薫を、霧に濡れ色移りする袖を通じて、鮮やかに読み解いている。

(15) とはいえ句宮もまた浮舟その人をどこまで見つめているかはあやし

い。中の君に移り香を残していった薫への対抗意識が、浮舟その人を置き去りにして、浮舟を求めている側面があり、結局さして変わらぬふたり(神田龍身「分身、差異への欲望——『源氏物語』「宇治十帖」——、『物語文学、その解体』平成3年 有精堂刊)にひき裂かれているところに浮舟の悲劇がある。

(16) 『小野の浮舟物語と継子物語——出家譚への変節をめぐって——』

(『中古文学論攷』14 平成6年3月)。足立氏は、継子物語の良き母(実母)、悪しき母(継母)の対立構造をつき崩し、実母と娘の葛藤から立ち上がる浮舟物語を読み解く過程で、継子物語の要素をまつわらせながら浮かぶ「妹尼」《母》《中将の君》の構図を示す。

(17) 注(3) 小嶋論文は浮舟に「昇天不能のかぐや姫」を読み取り、その「月の都」を「非在としての究極の地」と見取る。小嶋氏が論証するように、もの思いや罪を増殖させる浮舟の出家は、昇天ではありえない。私見では、光源氏の出家の様子が語られないことで、温存された《出家》昇天の構図が、浮舟の出家によって打ち砕かれたとき、浮舟の繋がれた流離と一対をなして、もはや実在の場をもたず形をなさない、「非在」といわれるような、ネガティブな「月の都」が物語に顔をのぞかせているととらえる。流離の内にこそ「月の都」の可能性が宿ると考えるからだ。それを本稿では「非在郷」と名づけたが、浮舟においてそれは、彼女が仏教の教義もおぼつかない、むしろそのコードの埒外にあればこそ(高橋亨「存在感覚の思想——《浮舟》について——」『源氏物語の対位法』昭和57年 東大出版刊)、「阿弥陀仏」なるもののなかに託されているととらえる。

(18) 「九重の雲の上」については、萩野敦子「『狭衣物語』の発端」(『国語国文研究』94 平成5年7月)。「天の羽衣」については、『西宮記』

卷十一(大嘗会事)に「天皇着天羽衣、浴之如常」(故実叢書、昭和6年10月 吉川弘文館)とあり、三谷栄一「大嘗祭と文学誕生の場」(『國學院雑誌』平成2年7月)も、他例をもって指摘している。これらをふまえ、「即位」昇天の問題について、本論と同視点から、注(1) 拙稿で論じた。なお狭衣の辞世の歌「九重の雲の上まで昇りなば天つ空をや形見とは見む」は、校本によると底本、深川本、平出本のみにある本文。これらいわゆる第一系統本は、この事件と即位をより明確に連繫させよとしているのだと見ておく。

(19) 「非在郷」(実在の場はもたないものの安楽な場)と「混在郷」(異質なもの共存する不安な場)とを対にしたのは、M・フーコー『物と言葉』(昭和49年 新潮社刊)に拠っている。むしろ浮舟が「非在郷」にたどりつけるなどという気はない。非在の場にたどりつけるわけもない。けれど、それを仰ぎ見ている、あるいは仰ぎ見ようとしている点に、両者の差異を見出したのである。